

女子教育の過去と未来をつなぐ

教育は女性の生き方をどのように変えて来たのか、どのような未来をもたらすのか。

本学科の3人の講師が、イギリスとアメリカの文学文化、また言語の側面から、女性と教育の問題を考察しました。

会場には、学生から一般まで多くの方が訪れました。

《イギリス》大学はユートピア？ —イギリスの女子大生小説から教育の可能性を探る

19世紀イギリスの女子教育改革により誕生した「女子学生」とは、どのような存在だったのか。

小説を題材に、教育が女性の生涯にどのような影響を与えるかを考えました。

講師：志渡岡 理恵氏 実践女子大学 文学部英文学科 准教授



■家庭での教育から、集団で学ぶ中等教育へ

19世紀前半まで、中産階級以上の女性たちは主に家庭で、家族やガヴァネス（家庭教師）から音楽やダンス、フランス語会話などの教育を受けていました。19世紀中頃、中等教育の場として女子のパブリックスクールが登場します。基本的に全寮制で、代数や幾何、スポーツ教育などが行われていました。そして、パブリックスクールに通う少女たちを描いた小説が爆発的な人気を博します。中でも人気だったのが、アンジェラ・ブラジルという作家の作品です。その1つ、*The New Girl at St. Chad's* を見てみましょう。

それまでお屋敷でガヴァネスから教育を受けていた15歳の主人公オナーが、イングランドの女学校に入学するというストーリーです。学校生活の描写には現実の女子教育改革が反映されています。カリキュラムは男子パブリックスクールと同様です。し、クリケットやホッケーといったスポーツをする場面もよく出てきます。オナーは自分が共同体の一員だと自覚し、学校は家柄や経済状況ではなく、個人の資質や共同体にどのような貢献ができるのかで評価される場だと理解していきます。

■「家」から離れた環境の中、「個」としての成長を図る

イギリスでは、1848年にピースカレッジ、翌年にブルゴットカレッジが設立されました。この2校がイギリスにおける女子高等教育の起源と考えられています。

女子高等教育機関は男性中心社会に対抗する共同体として機能し、さまざまな職業につくための基礎能力を持ちリーダーシップを發揮する、自立した女性の育成が目指されました。女子大生小説も著され、学生生活の中で、登場人物が友情を育む様子などが描かれています。ドロシー・セイヤーズの作品には、オックスフォード大学を卒業した主人公が母校を訪れるシーンで始まるものがあり、世間から距離を置いて学問を追究する大学の穏やかな空気に、楽園をイメージする瞬間も描かれます。

一時的に厳しい社会の現実からある程度守られたユートピア的な環境の中で、学生たちは社会の仕組みを知り、それまで自明だと思っていたことがそうではないと気づき、自らの可能性を試し、自分を知り、いろいろなネットワークを築く。大学はそうした場として機能する側面を持っていたのではないかと考えられます。

《アメリカ》教育への扉を開くために —アメリカにおける女子教育の理念と軌跡

19世紀のアメリカ合衆国において、女子教育の普及に向けてどのような活動が行われたのかを

たどりましました。そして、過去から現在の女子教育につながるものと、未来展望を考えました。

講師：佐々木 真理氏 実践女子大学 文学部英文学科 准教授



■中等教育機関・セミナーの登場

19世紀初頭、女子の教育機関はありましたが、簡単な読み書きや刺繍、音楽演奏、礼儀作法を教える程度のものでした。1820年代、セミナーという中等教育機関が設立されるようになります。これは、「母親や教師として子どもの教育に貢献できる」女性の育成を目的とし、生理学や代数・幾何・地理・歴史・家政学などをカリキュラムに取り入れた実学志向のものでした。

代表的なセミナーに、キャサリン・ピーチャーが設立したハートフォードや、メアリー・ライアンが設立したマウント・ホリーオークがあります。これらの特徴的な点として、体育科目等を通じて身体育成や健康維持が図られたことと、リーダーシップを育む体制づくりが行われたことが挙げられます。

■女性の未来を広げた高等教育機関・カレッジ

19世紀後半の南北戦争終結後くらいから、女性のための高等教育機関を設立しようという機運が高まっていきます。この背景には、ジャクソニアン・デモクラシー（19世紀前半の大統領で、学歴や家柄ではなく個人の実力を重視する民主主義を提唱したアンドリュー・

ジャクソンが推進した民主主義）下での公的教育の普及や、教育機関の増加に伴う教師不足、その一方で女性教師は安い賃金で雇えたこと、南北戦争で多くの男性が亡くなり女性の雇用機会が増加したことなどがあります。

しかし、「女性に教育可能性 (educability) はあるか」「女性の身体に悪影響があるのではないか」「高等教育に実用性があるのか」という点について、社会的な議論もありました。

その中で、女性を対象としたカレッジが設立されていきます。どの大学でも男子大学とほぼ同じカリキュラムが用意されました。体育科目導入による健全な身体や、リーダーシップの育成が重視されるなど、セミナーから受け継がれた点もあります。

こうしてカレッジでは、女子高等教育に対する世論の壁を乗り越えるために、男子大学と同レベルの教育を行って学位を与えるとともに、健全な身体を育成していることをアピールしました。

19世紀アメリカの女子高等教育は、女性の教育可能性を、社会と男性に説明するための試みであったと考えられます。それは女性の職業選択の機会を広げ、ロール・モデルを提供し、リーダーシップを育成するという大きな成果を挙げました。

《英語学》言語と女性 —ことばを変えれば社会も変わる

1970年代にアメリカで議論が始まった「言語における性差別」がどう変革されたかを英語・日本語の両面から概観。「性差別のない言語を用いることが女性の未来を拓く」と提言しました。

講師：村上 まどか氏 実践女子大学 文学部英文学科 教授



■アメリカにおける流れ

英語では、男性の敬称は Mr. と一貫しているにもかかわらず、女性の敬称は未婚・既婚によって Miss/Mrs. と区別されます。こうした性差別に対抗するものとして 'Ms.' という敬称が生まれ、1972年にはそれをタイトルとした女性解放指南の雑誌が創刊されました。

1975年、言語学者ロビン・レイコフが *Language and Woman's Place* を出版。英語における女性言葉のさまざまな問題点を指摘しました。しかし「総称の he」（後述）については、「記号として無意識に使用されている状態であり変革は進まないのではないか」と消極的な見解を示していました。

1992年、アメリカ言語学会が「たとえ英語として不自然でも、性差別的な語法・用語は避けるべき」という声明を出しました。これ以降、多くの教育機関や公的機関、学会が、英語における性差別撤廃に向けて指針を作成しました。

■He-man Englishの解消に向けて

'He/his/him' という男性名詞で女性をも含める「総称の he」と、男性を表す 'man' で女性も含めた人間を表す「総称の man」を、「he-man English」と呼びます。性差別撤廃に向けた動きの中で、不自然にならずにこの問題を解消する試みが、下記のように重ねられました。

- (1) 女性代名詞も加える
(例) Everybody has his or her habits.
- (2) 複数形の代名詞を用いる
(例) Everybody has their habits.
- (3) 代名詞を使わずに済ませる
(例) Everybody has some habits.
- (4) 最初から複数形名詞を用いる
(例) All people have their habits.

推奨されるのは (3) (4) です。また「総称の man」は 'people, human being(s)' 等に、複合語の '-man' も '-person(s), -people' 等に変える、といった取り組みが行われました。

■言葉は世につれ—日本語の場合

日本語にも、性差別につながる言語表現は多数存在します。「女性を排除する表現 (例) ○○氏未亡人、ご父兄」や、「ことさらに男女を強調する表現 (例) 女のくせに、男がすたる」などは使用しないよう、ジャーナリズム分野では通達が出ています。

しかし、「ご主人・奥様 (相手側) / 主人・家内 (自分側)」の表現については、「夫 / 妻」では言いにくく口語でおさまりが悪い、「ご主人、ご主人様」を使わない場合「あなたの夫」を指す適当な言葉がない、といった課題があります。その一方で、「OL (オフィスレディ) ⇒ 会社員」「看護婦 ⇒ 看護師」など、性差別表現を解消した成功例も存在します。

■まとめ

2014年にカナダの教育委員会が、小学校教育にジェンダーフリーな代名詞 'xe' を採り入れることを発表しました。このように、性差別的な言葉に気づかせ別の表現に言い換える提言をしていく教育が重要です。言語は社会を反映する鏡でもあります。言語の側が能動的に社会を変えていくこともできるのです。

質疑応答

[来場者] 英語学を切り口とした講演の、「日本語における夫婦関係の言語表現」の問題に、日本の男女関係の課題が如実に出ていないかと感じます。講演をされた先生方は、女性として日本社会に疑問や苛立ちを抱くことはありますか？

[村上] 夫婦関係の言語表現についてはプライベートな要因も大きく、意識はなかなか変わらないし、言葉を言い換えてもうまく浸透しない側面があると感じます。しかし地道に向き合っていけば、いつか適切な表現が生まれた時にうまく収まるのではないかと期待しています。

個人的には、夫婦別姓が合法的に認められないことに疑問を感じます。これが普及すれば、相手側の配偶者を名字で呼ぶことができ、家族間の人間関係も差別なく言葉で表現できるようになるのではないかと思います。

[志渡岡] 私が現在、一番疑問を感じているのは雇用問題です。非正規雇用の急激な増加に憤っています。

[佐々木] 私もいろいろと怒りを感じることがあります。しかしその一方で、アメリカにおける女性問題に向き合っていると、100年150年という時間をかけて状況が変わっていったことがわかります。10年単位ではあまり変化はしないかもしれませんが、長い時間をかけて状況は良くなっていくのではないかと思いますし、その流れの中、女子大学で教育に携わっていることにやりがいを感じています。

【公開講座アンケートより】

「女子と教育との関わりが、幅広い角度から理解できた」という声が寄せられました。

参加者の声

【一般参加者】

- 女性が教育の権利を獲得するのに苦労していたということがわかり、自分は教育を受けられて恵まれていると感じた。(20歳代/女性)
- 欧米においても、女子教育発達の初期には日本と共通する問題があることに気づかされた。より具体的に教えていただきたいと思った。(60歳代/男性)

【学生参加者】

- 普段先生方がどのような研究を行っているのか知る機会が少ないので、今回の講座はとても興味深かった。
- 村上先生の発表で紹介された男女兼用の代名詞 'xe' の出現には驚いた。どのような使い方なのかを詳しく知りたいと思った。